魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

ダル神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

【Ｎコード】
Ｎ８３７８Ｘ

【作者名】
ダル神

【あらすじ】
どんな世界でも、どんなルートでも、改変された世界でも、さやかの最後は悲しいものでした。でも、そんなことはないんだよ。
一人で恋に突っ走って、頼まれてもいない事にその身を犠牲にして、とんでもないお節介でありがた迷惑な君は幸せになれないわけじゃあないんだよ。救われないわけじゃあないんだよ。報われないわけじゃあないんだよ。
これは、どうしようもない不幸な女の子が幸せになるお話。

これはpixivと重複連載してます

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない（前書き）

初めまして。ダル神です。初めて書いた小説です。みんなに読んでもらえたら嬉しいです。

どんなことでもいいので感想いただけると最高に嬉しいです。

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない

僕こと上条恭介の後悔に満ちた懺悔を聞いてほしい
聞かされるほうはたまったものじゃないだろうけど聞いてほしい、
僕は語ることをやめない
たとえ誰も聞いてくれないとしても

僕は昔からヴァイオリンが得意で大好きだった
みんなが僕の音を聴いてくれることが嬉しくてみんなが笑顔になる
のが僕の誇りだった
僕は夢中になって練習した、みんなが笑顔　で聴いてくれるから、
さやかがまるで自分のことのように喜んでくれるから
それが嬉しくてたまらなかった

だけどそんな夢はすぐに終わりを告げた　あっけなく
無惨に

交通事故にあった
一瞬のことだった
気がついたらベットの上だった
意識がぼーっとするなかただ動かない左手を見ていた
とめどなく涙が出て止まらなかった

悪い夢なら早くさめてくれ
だって
こんなのあまりにも　…
理不尽じゃないか
突然すぎるじゃないか
そんなの現実として受け止められるわけないじゃないか

受け入れるわけないじゃないか
なんで僕なんだ
弱い僕はどうしても認めることができなくて
ただ現実逃避するしかなかった

あれから数日たって医者がリハビリの説明など回復は難しいなど淡々と説明してくるが頭に入らない
だれもいない病室で僕はただこの残酷すぎる世界に呆然とするしかなかった

そこで声が聞こえた
廊下に声を殺して泣いている女の子がいた
姿は見えなくても誰かはすぐにわかった
わからないはずがない
あいつはいつだって強くて優しく僕とは真逆の
僕のヒーローみたいな奴だでも今日は泣いている
誰にも涙を見せたことのないあいつが
今日は泣いている
そうだ
泣かない奴なんてこの世にいない
あいつは誰もいないところで泣いていたのだ
誰にも気がつかれないように
いつも一人で泣いていたのだ

そんなことにも気が
つかず、あいつを泣かせた自分がなさけなくて

「さやか」
僕はいつの間にかあいつの名前を呼んでいた

さやかはおずおずと顔だけひょっこり出した
さやかの顔は涙で目を晴らして真っ赤になっていた
今まで元気がよかった顔しかみてこなかったので、弱々しいさやかは新鮮でなんか萌え…
じゃない
「なんでさやかが泣いてんだよ」
「だって！恭介の…」
「それなら大丈夫、僕は決めたよ」
「え…」
「リハビリするよ、先生も可能性がないわけじゃないって」

「ほんとに？」
不安そうにさやかは言う
「ああ、もちろん」
僕は笑顔で答える

さやかの顔は笑顔になった

まるで太陽のようなさやかの笑顔をみて、やっぱりさやかはこの顔が一番にあっていて、かわいいな…

なんてことを思ってしまう

さやかのおかげで前を向いて生きていくことができる

あれから1ヶ月ほどたった
僕は毎日リハビリをして毎日さやかがお見舞いに来てくれた

お見舞いに来てくれることは嬉しくてリハビリの励みになった

ある日さやかは僕のためにクラシック曲のＣＤを買ってきてくれた

「ありがとう、さやか
これレアなＣＤでなかなか手に入らないんだ
一緒に聴こう」イヤホンを自分の片耳にしてもう一つの方をさやかにわたす
「ほぇ…う…うん」なぜか顔を真っ赤にさせておずおずと隣に座ってイヤホンをつける

僕は夢中になってさやかにこの曲を説明する

うれしいはずなのに涙が溢れて止まらなかった
それは曲が美しいとかではなく

ただ悔しくて
不安だった

このままリハビリしても回復しないのではないかという恐怖と不安

こんな美しい曲があるのに奏でることができない悔しさ

僕はさやかに気づかれないように声を殺して泣いた

あれからさやかはよく僕の好きなＣＤを買ってきてくれた

お金を払うといってもあたしの好きでや
ってることだからと受け取ってくれず
ただ僕の中には不安　と恐怖がつのるばかりだった

そして世界はやっぱり残酷で

僕には希望も夢もなく
ただ無惨に現実という壁に押しつぶされるだけだった

医者に現代の医学では僕の左手は治らないといわれた

薄々気づいていた
感覚がなく全く動かない左手

言われるまえから僕は知っていた

ただ認めたくなくて
受け止められなくて
わかっていた事なのにどうしてこんなに頭が真っ白になるのだろう

心にぽっかりと穴があいたみたいだ

人形みたいに力なく僕はベットの上にいた
いつベットに戻ったのかわからない

もうそんなことはどうでもいいか

すべてがどうでもいい

生きてることすら
今日もさやかがお見舞いに来てくれた

何も知らないさやかはいつもみたいにＣＤを買ってきてくれて
自慢げにだしてくる
僕にはけして奏でることのできない音楽を

僕の中で今まで溜め込んだ黒い感情が一気に溢れ出す僕は涙を流しながら

訴えるように

責め立てるように

「さやかは僕をいじめているのかい？」

自分の左手をＣＤレコーダにおもいっきり叩きつける

レコーダは音を立てて壊れて僕の左手はその破片が刺さり血を流すがそんなことはお構いなしに叩き続けた

「こんなことしても全然痛くないんだ

感覚なんてないんだ」

レコーダはとっくに壊れているが叩き続ける

いや壊れているのは僕の左手で

僕自身なんだ

「もう止めて！」

さやかは叫んで僕の左手をつかむ

あわてて看護士さんも止めに入る

それでも僕は止まらない

温かいはずのさやかの手のはずなのに何も感じないんだ

僕は取り押さえられるという形で体を固定される

「さやか、もう見舞いにはこないでくれないか
もう治らないんだ
さやかがくるとただ辛いだけだから」
「そんなことない！
諦めなければ、きっとなんとかなるよ！」
さやかは涙を浮かべながらいった
僕は乾いた笑顔を浮かべて
「もう諦めろって医者に言われたよ…今の医学じゃこの腕は治らない
奇跡か魔法じゃないかぎり治らないって」
「奇跡も魔法もあるんだよ！」
僕は生涯この時の僕を許さない
結果を言うと
さやかは僕のせいで
僕の左手と引き換えに
すべてを失うことになる

第一話　弱かったあの日の僕を、僕は一生許さない（後書き）

いかがでしたでしょうか？

楽しんでもらえたならこれ以上嬉しいことはありません。

感想どうかお願いします。

第二話　何と引き換えに得られた希望とも知らずに

「奇跡も魔法もあるんだよ！」
さやかは涙を浮かべながらまっすぐ僕を見ていった
さやかが帰ってから数時間がたった
何をやってるんだ僕は
僕はたださやかにあたっただけだ
さやかを傷つけただけだ
僕は最低だ
だけどそんなこと、もうどうでもいいことじゃないか
むしろよかったぐらいじゃないか
さやかもあれだけ酷いことを言われたんだ
もう2度と僕と会おうと思わないだろう
奇跡も魔法もあるんだよ！
さやかのこの言葉だけがひっかかる
まだ僕に会うつもりなのだろうか
彼女はまだ僕が大丈夫だと思っているのだろうか

僕はもうとっくに壊れているのに
彼女は僕に何を望むのだろう
でも何かがひっかかる
まるで奇跡も魔法も知っているかのような迷いなくまっすぐ僕を見る瞳
さやかのその言葉に希望をもちたくなる自分がいやになる
現実とはそんなあまいものじゃないと僕が一番理解しているはずじゃないか
あじわってきたはずじゃないか
僕は布団をかぶり、何かに怯えるようにうずくまる
もう何もかも嫌になる
僕は布団の中で自分の左手を見た
僕は驚きのあまり飛びはねるように布団を引っ剥がす
夕方に自分で傷つけた後がない
跡形もなく消えている
包帯を取ってよくみると

交通事故で痛々しく傷ついていた所もなくなっている
まるで悪い夢だったかのように傷一つない
左手をグーパーさせる
かすかに感じる感覚がうれしくてたまらない
そうだ
感覚ってこんな感じなんだ
確認するように左手を開いたり閉じたりする何が起こったのか全く
わからないけど
うれしくてたまらない
涙がとまらない
「本当だ…
さやかの言った通りだ
奇跡も魔法もあるんだ」
僕は一晩中泣いて
今おきた奇跡にただ喜ぶ
無邪気に喜ぶ

それが何と引き換えに得られた希望とも知らずに

第三話　この曲を君に捧げます

僕の左手は現代の医学では治らないと医者に言われた
だけど昨日の夜中治らないはずの左手が突然治ったのだ
なんの前触れもなく
医者にも奇跡としかいいようがないと驚ろかれた
僕は僕で嬉しさのあまり一睡もしていない
貫徹である
そのため変なテンションは目を瞑ってもらいたい
家族にいち早く連絡する
母さんも父さんも泣いて喜んでくれた
そしてさやかにも連絡しようと携帯を手に持ったとき昨日の事を思い出す
昨日あんな酷いことを言っておいて
なんて言えばいいんだ
それでもこのことはどうしてもさやかにだけは連絡しなきゃいけない
そんな気がする

電話すると出てくれない可能性があるのでメールにしよう
とりあえず左手が治ったことは秘密にしておいて
『昨日の事をどうしても謝りたい、呼びつけて悪いんだけど病院に来てくれないかな？』

すると５秒後に
『ＯＫ！学校終わったらすぐ行く！
魔法少女スーパーさやかちゃんのスピードなめんなよ！』

速！！
ていうか
テンション高！！
なんだよ魔法少女って…

まぁ僕も人のことはいえないんだけど

まさか、さやかも貫徹なのか

それにしても昨日のことは全く怒っていないようで

気にしてないようで

堪えていないようで安心した

午後３時１０分
ちょうど学校の授業が終わったころだろう

僕は病院の入り口で待っていると

さやかが手を振ってこっちに走ってくる
速！！
いま3時１１分なんだけど！授業終わってまだ1分なんですけど！
ていうか、さやか絶対授業さぼったよね！
ツッコミどころ満載のさやかだがとりあえず今は飲み込む
僕は頭を下げて
「昨日は酷いこと言って本当にごめん」
松葉杖なのであまり深くは下げられないけど
「あはは。そんなこと全然気にしてないのに！
もしかしてあんなことでさやかちゃんが落ち込んでるなんて夢見ちゃってた！！
乙女だな～」
「現役乙女に言われたくないよ
それにあれは相当な事件だったとおもうけど」
乙女なら軽くトラウマになるほどの
ああ、なるほど。さやかは乙女じゃないのか
もしかしたら４０代後半のおじさんなのかもしれない
「恭介、なにか乙女の純情を踏みにじるようなこと考えてない？」
「いえ、ぜんぜん」
よかった本当に気にしてないみたいだ　それからは僕の病室で話をしていた
「そっか、退院はまだまだなんだ」

「足のリハビリがまだ済んでないしね。ちゃんと歩けるようになってからでないと」

「手の方も一体どうして急に治ったのか理由が全くわからないんだってさ。だからもうしばらく、精密検査がいるんだって」

「恭介自身はどうなの？どっかおかしいとこ、ある？」

「いや、無さ過ぎてこわいっていうか…事故にあったのさえ悪い夢のだったみたいで
さやかの言ったとおりだ
奇跡も魔法もあったんだ」

「でしょ！」
ニカッと笑うさやか

その笑顔に僕は何度元気をもらったことだろう

ありがとうと言おうとした矢先

「そろそろ…かな？」

さやかが不意に言い出した　「恭介、ちょっと外の空気、吸いに行こ」

エレベーターに乗ってついた所は屋上だった

屋上には父さん母さんや先生、看護士さんが集まっていた

みんなが拍手をしてくれる
僕はただ呆然とするしかなくて
「みんな…」
「本当のお祝いは、退院してからなんだけど…足より先に手が治っちゃったしね」
さやかは本当に嬉しそうに微笑む
そこに、父さんが出てきて
狼狽える僕にヴァイオリンを手渡す
「お前からは処分してくれと言われたが…どうしても捨てられなかった」
僕は泣くほどうれしかっけど涙をこらえて
さやかを見る
そしてさっき言えなかった言葉を口にする
「さやか…本当にありがとう
お礼はいいたりないけれど…」「ちょっと！いきなり何言って…！
恥ずかしいじゃん！」
「この曲をさやかに送ります」

僕はヴァイオリンを奏でた

もちろん久しぶりに弾いたから失敗だらけだけど

それでもさやかは涙をこらえるように満面の笑顔を見せてくれた

幸せそうな笑顔を見せてくれた

ああ、これが僕の誇りだ

第四話　君をどうしようもなく壊してしまった僕は…

今日と言う日を僕は、上条恭介は一生わすれない
さやかを壊した日をわすれない
さやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやかさやか
君はもう笑ってくれない
僕に笑顔を見せてくれないだろう
僕のかわりに壊れてしまったさやか
僕のせいで壊れてしまった
僕は壊れたままでよかったんだ
僕は今まで笑って幸せそうに生きた自分が恥ずかしい
殺してしまいたいほど恥ずかしい
僕は生きるべきではなかった
あの病院で死ぬべき
だったんだ
あの事故の日に死ぬべきだったんだ
なんでさやかがかわりなんだ

なんでこんなことになってしまったんだ
僕のせいだ

なんでさやかは泣いている

僕のせいだ

なんでさやかは壊れた僕のせいだ

なんでさやかは苦しんでいる

僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕のせいだ僕が生きていたからだ

僕が幸せをのぞんでしまったからだ

僕が誇りと生きがいを求めてしまったからだ

僕の弱さのせいだ

僕はあの日の理不尽さを受け入れるべきだったんだ

あの残酷な現実を恋人のように愛するべきだったんだ

できることならあの日の僕を殺したい

さやかを追い詰めた張本人である僕を殺したい

殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい殺したい
僕は僕を殺したい
滑稽だ
あの屋上でしたり顔で演奏した自分が
さやかを幸せにさせたと思っている自分が
滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ滑稽だ
だってこんなことあるか
僕の左手はさやかの全てを喰い潰してできたものだ
僕はさやかを喰い潰して生きている僕の幸せは僕の大切なものを喰い潰さないとなりたたない
さやかはあんなに僕に元気を幸せをくれたのに
僕はさやかの幸せを元気を奪うことしかできない
僕はさやかに何一つしてやれない
さやかを苦しめることしかできない
さやかがさやかがさやかがさやかがさやかが
あああああアアアア

いやだ

考えたくない

何も考えたくない

これほどの苦しみがあるか

このまま壊れて死んでしまいたい

なんで僕はまだ生きている

僕は死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ死ぬべきだ

誰か僕を殺してくれ　見るも無惨な姿に変えてくれ

ただの肉の塊に変えてくれ

僕はもうとっくに狂っていた

僕がどうしてこんなにも狂ってしまったのか思い出してみよう　左手が治って数日後僕は松葉杖で学校に行っていた。

僕は久しぶりに会うクラスメイトと楽しそうに何かを話していたのだと思う。

どんな話をしていたかなんてどうでもいい。

僕は気がついてあげられなかったのだ

いや、気にはなっていたのだと思う。

彼女が苦しんでいることを。

いや、ただの言い訳だ。

僕は認めたくないだけだ。
彼女を苦しめながら
僕は浮かれてはしゃいでいた。
僕が浮かれて喜べば喜ぶほど彼女は苦しんでいただろう。
でも僕は浮かれてはしゃいで喜んでしまった。
学校に来れることがうれしくて。
もとの生活に帰って来れたのがうれしくて。
彼女に話しかけることができなかった。
彼女を一人にすることしかできなかったんだ。　僕はクラスの友達と、僕の回復祝いにカラオケにいった

その帰りに暁美ほむらさんに出会った

彼女と偶然あったおかげで僕は気ずくことができた

彼女なしでは信じることができなかった
彼女のおかげで僕は狂った
カラオケはリハビリがあると言えばすぐぬけられた

今日学校でさやかの元気がなかったのでさやかの家でも行ってみよう

カラオケボックスからでたら、そこには転校生の暁美ほむらさんがいた

初めて話すので緊張する
少しギクシャクしながら話す

「暁美さんも来てくれたんだ」

「いいえ、少し話をしましょう上条くん」

「いいけど、まさかそのためにずっとここで待ってのかい？」
彼女は無表情で答える
「なぜ私があなたのような人を待たないといけないのかしら？へんな勘違いやめてくれる」
この人怖い！
それともこれがツンデレというやつだろうか
でも彼女の人形のような無表情加減が僕にそんな勘違いをさせてくれない
「君とは初めて話すけどわかったことが一つある」「僕のこと嫌いだろ」
僕は恐る恐る涙声でいう
「あら、よくわかったわね
私はまどかを苦しめ奴はきらい
あなたも美樹さやかも」
これは別の意味で怖い
それにまどかって鹿目さんだろ
僕もさやかも彼女を苦しめた覚えはないんだが

本当は今すぐにでも逃げだしたいのだけど松葉杖なのでそれも無理だ

「あなた、魔法少女ってどんなのだと思う？」

彼女は突然そんな話を切り出した

「えっ…？」

「いいから言ってみて」

有無を言わさぬ瞳が僕を貫く

なんかさやかも魔法少女がどうとか言っていたような気がする

最近流行ってるのだろうか

「…えっと、魔法を使う女の子が悪の怪獣と戦うみたいな感じ？」

「ええ、その通りよ」

「じゃあ、魔法少女はどうやってなれると思う？」これは難しい

うーん

全然わからないので適当に答える

「ある日そらから魔法のステッキが落ちてきて、そのステッキに選ばれたから？」

「あながち間違ってないわね

でも選ぶのは悪の使者で
選ばれたものはその使者と契約すればなんでも一つ願いが叶うの
そのかわり契約を結んだ少女たちは魔法少女となって
死ぬまで魔女と戦い続けなければならない」
「そうなんだ…
で、なんで僕にその話をするんだい？
まさか僕が魔法少女オタクとでも思ったのかい？」
「いいえ、ただあなたを見ていると
まるで魔法少女にでもなったのかと思って
だってあなた奇跡でその左手が治ったのでしょう
願いが叶ったのでしょう」
「確かに奇跡だとは思うけど、でも僕は男だよ
まさか女の子に見えた？」
「確かに男は魔法少女になれないわ
じゃあ、あなたのことを思う誰かが
例えば
美樹さやかが魔法少女になったとしたら！　あなたの為に彼女は全
てを投げ出して魔法少女になったとしたら！

彼女はあなたの願いの為に死ぬまで魔女と戦いつづけるのだとしたら！」

「何を…言って…」

「ごめんなさい…

でも

覚えておいて

あなたのために一人の女の子が不幸になっているということを」

そう言って彼女は消えた

いままでのが夢だったように

まるで奇跡や魔法で消えたかのように

まさか…

そんなこと信じられる分けない

そんなことありえない

でも、そのありえない

現実では不可能なことが起こっている

例えば僕の左手

もう二度と動かないはずの
死んだはずの左手が何もなかったように生きている
でも、だからってなんで魔法少女
なんでさやかが魔法少女で、死ぬまで魔女と戦わなきゃいけないんだ
事故で奇跡の復活を遂げた実例はないわけじゃないだろ
僕もその内の１つでいいじゃないか
なんでこんなに僕はこだわっているのだろう
あんなのただの電波さんの戯言だろう
いや、ちがう
僕は聞いたことがあるんだ
彼女の確信をもった言葉を
奇跡も魔法もあるんだよ！
そうだ、確かにさやかはそう言ったんだ
まっすぐ僕を見て
いや、でも、そんな

そんなことで信じられるわけない
信じられるわけがないじゃないか
あまりに突拍子もなさすぎる
じゃあ、どうしてさやかはあんなに辛そうだったんだ
どうして、あんなに苦しんでいたんだわからない
だが不安は募るばかりだ
僕はさやかのもとへと急いで行く
危なっかしく
転びそうになりながら
さやか！
さやかー！
彼女に助けをもとめるように名を呼ぶ
僕は何かに足をつかまれて転び
つかまれる？
僕は足元をみるとそこには人間の手のようなものが

手だけが僕の足をつかんでいる
周りを見るとそこは見たこともない世界が広がっていた
歪んだ世界に
世界の終わりを連想させる門があって
そこからぐちゃぐちゃになった人間のような形のようなものが出てきて
僕に近づいてくる
わからない
怖い
足がつかまれていて逃げることもできない！
気がついたら僕の周りには怪物だらけだった
僕は怪物に囲まれて　もう終わりだと思った
青い光が怪物を一瞬にして全滅させる
それは少女だった
マントを顔にくるんだ少女だった
その少女は圧倒的な力で

青い光を身に包み込んで
怪物を殺しまわる
僕はその少女を
いやその魔法少女を知っている
顔を隠しているが
魔法と奇跡を振りまき
剣で魔を討つ彼女を知っている
さやか！
僕は彼女を呼ぶ
あいつを見間違えるわけがない
さやか！
僕は魔法少女の名前をよびつづける
大方の魔女を倒したさやかは動きを止めてこちらを見ている
顔はまだ隠したままだ
僕は足を引きずりながら近づいていく
「こないで！」

さやかが叫んだ瞬間彼女の身体が門からでた無数の腕に串刺しになる

ウソだ

さやかが

死

「うっ…、おぇええ」

僕はショックで胃の中身が逆流して地面に吐き出す

でもさやかは何でもないようにその腕を剣で切り裂いて

門を破壊する

すると周りの景色は霧のように消えてもとの見知った街路樹に出る

雨が降っていた

僕ははいつくばりながらさやかに近づいた

でもさやかの身体は穴だらけで血が噴き出していた

「さやか…」

でもすぐに彼女の身体は復元される

「えっ…」

僕がはいつくばりながら呆然としていると彼女は僕に近づいて
青い光で僕の怪我を全て治す
僕は立って歩けるようになった
立ち去ろうとする彼女の手をつかむ
「行くなさやか！」
するとさやかは顔を隠していたマントを取った
その顔はぐしゃぐしゃに泣きじゃくった顔だった「ごめんね、わたし化け物だから
化け物になっちゃったから
だから、もう、恭介とはお別れだよ」
「僕のせいなんだろ！僕の左手のせいでさやかは！」
「な…なんで、そんなこと、そんなわけない！これはわたしがかってに」
昔からさやかは嘘がへただった
「やっぱり、そうなのか…」
僕は絶望した
不安は現実となり、絶望に変わった

「僕のせいで…さやかは…」
さやかは僕の腕を振り払ってどこかへ飛んでいく
僕はさやかを追いかけながら
「待ってくれ！さやか！！」
一人叫んだ
走りながら暁美さんの言葉が僕をせめる
あなたのせいで彼女は魔女と死ぬまで戦い続ける
死なない身体
死ねない身体
化け物
僕がそうさせた
僕がさやかを化け物にさせてしまった僕はいつのまにか足を止めて、
うずくまっていた
さやかはもうダメだろう
あれは人間には耐えられない
あんなものに女の子が耐えれるわけがない

さやかはもう壊れてしまった
跡形もなく壊れてしまっただろう
いや、僕が壊して、殺してしまっただろう
だったら僕は壊れて、死ぬべきだろう
一人で壊れて、一人で死ぬべきだろう
僕はもうこの時に狂ったんだと思う

第五話　君は僕で、僕は君なんだ

雨が降っている

誰もいない街路樹で、一人しゃがみこんでいる僕

周りの建物はもう今は使われてないようで、ガラスの破片やらが落ちている

僕は自分の左手を見る

一度失ったはずの左手。死んだはずの左手。

苦しい

さやかを壊してしまった左手を見ていると苦しい

こんなにも苦しい

生きてるのも苦しくなるくらい

「こんな、左手！」

僕は周りに落ちているガラスの破片を手に取り

自分の左手に突き刺す

痛みなんて気にならない

何度も突き刺す

「こんな左手なんか！」

もう一度左手を壊してもさやかが救われる訳ではないのに

そんなはずないのに

取り返しなんてつくわけないのに

でも、僕はどうしたらいいかなんてわからない

自分を傷つけないと、壊さないと、殺さないと

そうしないといけない

そうする以外この苦しみは止まらない

後悔は止まらない

僕は僕を傷つけずにはいられない

他にどうしたらいいかなんてわからないんだ

僕はどうすればよかったんだ

わからない

もうなにもかもわからないんだ

僕はどうしようもなく泣いて

僕はどうしようもないくらい一人ぼっちだった
狂った
君を傷つけて
君をどうしようもなく壊してしまった僕はどうしたらいいか
わからないんだ
「僕は
死にたいんだ！」
狂った僕は一人で叫び続ける
一人絶叫する
「もうやめて！」
さやかが目の前に立っていた
さやかはもう魔法少女の姿ではなく、学校の制服だった
雨にずぶ濡れになって
さやかは泣き叫ぶように
「お願いだから、もう恭介を傷つけないで、恭介を壊さないで
死にたいなんていわないで壊れてもいいなんていわないで

自分を殺したいなんて言わないで
わたしは恭介が世界で一番大切なのだから
だから
恭介は幸せになってよ
わたしのことなんて気にしないで
わたしは恭介が幸せならそれでいいのよ
わたしは恭介が幸せならどうなってもいいのよ
恭介が幸せじゃないとわたしの願いが叶わないじゃない」
君がいないのにどうやって幸せになれというんだ「さやか！」
僕はさやかを抱きしめる
いや、しがみついた
もう、さやかがどこへにも行ってしまわないように
助けをこうように
すがりつくように
僕に残された小さく今にも壊れそうな希望を離さないように
「なんで、さやかはそうなんだ

誰かのために一生懸命で
誰かのために自分を犠牲にする
そのせいで、さやかはこんなことになってしまったんだ
僕はどうしたらいいんだ
さやかをこんなに苦しめている元凶である僕はどうすればいいんだ
なのに、なんでさやかは僕に優しくするんだ
お願いだから僕を殺してくれよ
僕を殺して少しでも楽になってくれよ」
「なんでわたしが恭介を殺すのよ
わたしは恭介が好きなのよ
誰より恭介が好きなの　でもわたしは化け物で怪物で
魔法少女だから
さっきも見たでしょ！わたしはあんなに酷い怪我も一瞬で治してしまう
わたしは死なない化け物なんだよ

そんな姿で恭介に抱いてなんて言えない
恭介にキスしてなんて言えない
だからわたしは一人になるしかないのよ！」
「さやかが化け物だって？
ふざけるな！
ここにいるのは小さくて今にも壊れてしまいそうな儚い女の子しかいない
今にも死んでしまいそうじゃないか
ほっておけるわけないだろ！
もうダメだと思ったんだ
壊れてしまったと思ったんだ
さやかが僕を殺さないと言うなら僕は絶対さやかを離さない
一人になんてしてやらない
一生そばにいてやる
さやかが死ぬまで魔女と
戦い続けるというなら僕は死ぬまでさやかと共にいつづけるたとえ
さやかがどんな姿になっても

なんどだってそうやって言ってやる

だってさやかはさやかじゃないか勝ち気で、自分勝手で、お節介焼きで、自分が弱くて泣いてるくせに、誰にもその弱さを出さない、いつも誰かのことばかり気にしてる

いつも誰かのことばかり考えてる

それがさやかだろう」

「だから

だからさやかはさやかのままでいいんだよ

さやかはさやかのままがいいんだ

僕がちゃんと見てるから

一生目を離さないから

だから他の何かになろうとしないでくれ

自分を殺すようなことはしないでくれ 」

「ずるいな…

これじゃ呪いじゃない

わたしの希望を呪いで繋ぎとめるの？」

「ああ、呪いでもなんでも使ってやるさ
さやかのためならなんでもしてやるさ」
僕はさやかをまっすぐ見る
さやかの目は涙で赤く晴れて、雨で濡れていてもさやかの涙ははっきりわかった
「さっき、告白してくれたよね
まだちゃんと答えてなかったね」
「いや！…あれはそういう意味じゃなくて…その、なんていうか…勢いで言っちゃったというか」
さやかは顔を真っ赤にして目が泳ぐ
「それとも、やっぱり僕じゃ…
ダメかな」
「そんなわけない…よ…」
僕はもう一度さやかを強く抱きしめた
「大好きだ
大好きだ
僕はさやかが

大好きだ」

「こんな私が？」

「そんなさやかがいい」

「死んでも簡単に生き返るゾンビでも？」

「どんな姿でもさやかを愛してみせる」

「わたしじゃ恭介を幸せにできないかもしれないのに？」

「僕がさやかを幸せにしてやる

それに僕はさやかと一緒にいられることが

こんなにも幸せだ 」

「僕たちは自分を傷つけ過ぎたんだ

僕たちは自分の足では、一人では立ち上がれないほど傷ついて、傷んでしまったんだ

だから僕たちは互いが互いを支え合わなければ簡単に崩れて壊れてしまうんだ

さやかは僕で

僕はさやかなんだ

もう自分を傷つけないことを僕は約束するよ

だから、さやかも自分を大切にすると約束してくれるかい？
もう二度と自分を殺してしまうようなことはしないと」

「わたしは恭介で

恭介はわたしならしょうがないよね

わたしは恭介を傷つけれない 」

弱い僕たちは互いが寄り添っていなければ死んでしまう

互いが補いあわなければ生きていくことができないんだ

僕たちはやっと生きることができるんだ

僕たちは互いの存在を確かめあうように

キスをした

後日僕は志筑さんに告白されるけど

結果は言うまでもない

第六話　ここで折れたら二度と立ち上がれない

「さやか…もう落ち着いたかい？」
「うん…ありがとう。でも、もう夜も遅いし…ご両親も心配しているだろうし」
「何言ってるんだい？さあ、行こう」
僕は彼女に手を差し伸べる
「本当にいいの？危険なとこなのよ、死んじゃうかもしれないのよ」
「僕は力なんてなくて、どうしようもなく足しか引っ張らないだろうけど。守ってもらわないと死んでしまうくらい弱くて格好わるいけど、でも、言わせてくれ。」
僕は精一杯格好つけていう
「そんな危ないところにさやか一人いかせるわけには行かない。それに、言ったろ。さやかを離さない、僕がちゃんと見てる、さやかを一人になんてさせてやらないって」
「…うん」
彼女はまた泣きそうになりながら精一杯笑顔を作って差し伸べた僕の手をとるのだ。僕は彼女を守ることができるだろうか。
力もなにも無い僕だけど、それでも彼女のそばにいるって決めたんだ。
　僕達は手を取り合いながら外に出た

そこには鹿目さんがいた
「鹿目さん？」
「まどか？」
「かっ…上条くん！」
さやかの家の前でずっと待っていてくれた彼女を無碍にすることは

彼女の親友であるさやかにはとてもできないようで、危険ではあるが鹿目さんも一緒に行くことになった
でも、鹿目さんは僕とさやかの姿を見ると心底安心したという感じだった

話を聞くと鹿目さんはさやかが魔法少女になる前から魔女退治を見て来ていたようで、僕からみたら大先輩のような人だった。
鹿目さんをこんな危険なことに巻き込んで大丈夫かな？と心配していた自分が恥ずかしくてたまらくなったのを覚えている。「他の魔法少女の子とも喧嘩して大変だったんだよ」
「ちょっと！まどか言いすぎ！」
「もう！本当に心配だったんだから」
でも、それ以上にさやかとずっといてくれたのが鹿目さんで本当に良かったと思った。
僕のせいでさやかがこんなひどいことになっても、さやかがなんとかさやかのままでいてくれたのは、壊れないでいてくれたのは、他でもなく鹿目さんのおかげだと思うと涙が止まらず、僕はただ彼女の手を取って
「本当にありがとう…鹿目さんがいてくれたからさやかは大丈夫だったんだね。鹿目さんがさやかの友人で本当によかった」
彼女は恥ずかしそうにてれていた。
「恭介…手！」
さやかに指摘されるまで握ってしまっていた。
さやか…もしかして怒ってるのかも…恐る恐るさやかをみると「まどかは私の嫁だ！誰にも渡さん！」
鹿目さんに抱きついていた
ほっとした。

初めての魔女退治。
その魔女は真っ黒な少女で体中から蛇のような形のものを何本も出

していた。
それはもう怖かった。
さやかはそんな恐ろしい魔女に勇敢にも堂々と真正面から突っ込んでいた。
それを僕は慌てて鹿目さんに
「あれは大丈夫なの！？」
と実に男らしくない反応をするばかりだった
鹿目さんはそんな僕をなだめるばかりだった
鹿目さんがいてよかった、僕一人だったらどうなっていたことか
魔女に襲われたときを思い出す。
でもあの時はさやかのことがあったのでそれどころではなくあまり覚えてはいなかったのだが、まさかこんな大変な中にいたとはあの時正義の見方が少しでも遅れてたら僕死んでたじゃん！と今更ながらびびり始める僕だった。

さやかは本当に強くて美しかった。
その戦いは負けたら死んでしまうなんてことを忘れてしまうくらいきれいでさやかは生き生きしていた。
鹿目さんはさやかが戦ってるときに
「さやかちゃん嬉しそう…本当によかった、上条くん…さやかちゃんのことよろしくね」
まるで母親のようだった
「勿論、僕以外の誰にもさやかをまかせるわけにはいかない」
そう答えると彼女は涙を流しながら笑っていた
僕はさやかから目を離すことはなかった
それが約束で、それが僕の戦いだったからだ

魔女退治はさやかの圧勝に見えた。
さやかの剣が魔女の体中に突き刺さっていた。
さやかも油断したのかこちらをむいてVサインをしていた。だけど

魔女はまだ生きていた、魔女は自分の首をねじ切り、その傷口から血のごとく吹き出す大量の黒い蛇の頭がさやかに向かってはきだされる。
僕は気がついたらさやかに思いっきりタックルをかました

「さやか！」僕は走馬灯のように時間が圧縮するのを感じる
さやかは言っていた。自分は不死身の化け物だと、どんな怪我も一瞬で治してしまうって
でもだからって、ほっておけるわけないだろ。
僕はやっぱりただ見てるだけなんてできない。
大好きな人が危険な目に遭っているんだ。
彼女だけは死なせたくないんだ。
もう死んでいるとさやかは言っていたが、僕だけはそれを信じちゃいけない。
魔女の攻撃はさやかを傷つけることはなかったが。
「ぐがあああああ」
黒い刃は僕の体を貫いて、　手足がもげる。
いってぇぇ！
痛すぎて何にも考えられない
僕は人生最大の痛みで気絶しそうになりながら
「さやか…速く逃げろ」
必死にだした言葉は酷く情けないものだった
僕はやっぱり彼女を守ることができなくて、そんなことしか言えなかったのが悔しかった

「いやあああぁぁぁぁ　、恭介が死んじゃう」
彼女は取り乱して僕の声は耳に入っていなかった

彼女だけはどうしても生きていて欲しかった
僕は力がないことが悔しくて

ただの人間であることが悔しかった
魔女は容赦なく僕達に黒い蛇牙をあびせる
女の子の声が聞こえた
「ったく…見てらんねーぜ」
2人の女の子が魔女の結界を突き破って降りてくる
一人は長い髪を結った赤い服で長槍をもった女の子
もう一人は長いストレートの黒髪に左手に盾みたいな円盤状のものを左手につけた灰色の服を着た女の子というか暁美さんだった
赤い女の子は魔女の攻撃を槍で一掃する　暁美さんは僕とさやかを抱えて魔女からはなれた
「しっかりしなさい！美樹さやか！あなたの守りたい人なのでしょう！あなたがやるのよ！」
彼女はキラキラした卵のようなもの、ソウルジェムというものを取り出した。
さやかから必要最低限の知識だけは教えてもらっていた　。
「速く！」
暁美さんがさやかに活を入れて泣きじゃくっていたさやかはやっと気がついたかのようにソウルジェムを出す。
僕の手足はみるみる治っていた。
痛みも、うそみたいに弾いた
赤い女の子も魔女を倒し終わったようで、結界は消えてもとの世界にかえる。
それが魔法少女である佐倉さんと暁美さんとの初めての出会いだった。泣いているさやかの手をつかむ。

それをさやかは握り返すことはしてくれなかった。
力なくうなだれている彼女が何を言うか僕にはすぐにわかった
「ダメださやか。ここで折れたら僕達は二度と立ち上がれない」
嗚咽を混じらせながらさやかは必死に訴える
「でも…わたしじゃ恭介を守れない。恭介が死んじゃうなんて絶対いやだよ…」
僕はさやかを抱く。　あの雨の日のような無様にすがりつくようにではなく
優しく抱き寄せた
大丈夫、さやかは大丈夫だという思いをこめて
「僕だってさやかが死ぬなんて絶対ごめんだ。だからさやかから目を離すことは僕にはできないんだ。わかってくれ、さやかから目を離すということは死ぬことなんだ」
「僕は生きていたい。さやかと共に生きたいんだ。僕が足手まといでさやかに迷惑をかけていることは理解しているつもりだよ。それでも僕はわがままを言い続けるよ。これだけは絶対譲れない。死んでも譲らない。これが唯一僕ができることだからね」「さやかの背中すら守れない頼りない僕だけど、さやかの背中は僕が見守り続ける」
さやかは顔を上げる。
彼女の瞳には一切の弱さはなく
「わかった。わたし強くなる。恭介の一人や二人簡単に守れるように、最強の魔法少女になるよ」
「それは安心だね」　「焼けるわ、あなたたちよく公衆の面前でいちゃいちゃできるわね」
無粋にも暁美さんが話を打ち切った。
いや、事実ではあったけど
僕達は恥ずかしくて死にそうだった
「そういえば、お礼がまだだった。本当にありがとう助かったよ」

「ええ、これは借りよ。だからあなた達は返す義務がある」
「な…何をすればいいのよ」
さやかが聞くと
彼女は相変わらず無表情で
「ワルプルギスの夜を倒すわよ」

第七話　見滝原市最大戦力

僕達の目の前にはワルプルギスの夜が現れようとしていた。
現代科学ではそれは自然災害と扱われている。
町の住民は全て避難所である見滝原中学校の体育館に避難している。

僕の家族も、そして彼女達の家族も　。
だけど僕達だけは知っている。
それが自然災害ではないことを。
それは自然が生み出したわけではなく
人の心が生み出した化け物であることを知っている。
そして、それは僕達の最後の敵で彼女達魔法少女の最後の敵なのだ。

ここまでくるのに本当にいろんなことがあった。
辛いことはいっぱいあった。
悲しい真実もいっぱいあった。
苦しい戦いだらけだった。
でも彼女達はそんなものに負けずここまできたのだ。
彼女達は自分の力で乗り越えた。僕がでしゃばる余地なんてなかった。彼女達は本当に強い、魔法少女だった。

暁美さんとワルプルギスの夜を倒すことを決めた日から今日まで僕達はその対策と協同戦線による実践をしてきた。
勿論戦闘における消耗を考えてできるだけの多くのグリーフシード（ソウルジェムの汚れをとるもの）を集めた。

魔女退治やワルプルギスの夜を想定した実践訓練には僕と鹿目さんもたちあった。

鹿目さんのたちあいは暁美さんに強く反対されたが、僕とさやか、本人の強い希望によりなんとか許された。

まず魔法少女とは本質的にどういったものかを知ることから始めるとして、暁美さんに聞いた。彼女の知識はワルプルギスの夜だけではなく、他にもいろんな事を知っているであろう確信があった。案の定彼女は多くの知識を有していた。

まず、魔法少女の力、魔法や能力は願いによって決まる

さらに肉体と魂を分離してソウルジェムにする事によって、肉体の欠損部分を魔力消費と引き換えに急速再生が可能。

肉体とソウルジェムを１００メートル以上離すと肉体は機能しない。痛みは自分の意志で制御することができるがあまりこれに頼ると動きが鈍くなる。

ソウルジェムの崩壊は死を意味する。

ソウルジェムの穢れがピークになるとソウルジェムはグリーフシードとなり魔法少女は魔女となる。

この事実に僕達は動揺を隠せなかった。

それでも彼女達は乗り越えた。

話しても大丈夫だという確信があったから暁美さんは話したのだろうけど。

彼女達魔法少女の能力と特性、共同戦線を想定した相性をはかる為に彼女達の戦闘をよく観察して、研究したさやかの場合

さやかの願いは僕の左手の回復が願いであることから、回復魔法が得意なようである。

基本戦闘スタイルは長剣を駆使した接近戦主体である。

さらに自分の肉体及び、自分の魔法で創生した武器、服には自身の魔力消費による強化が可能。長剣は最高で１２８本まで複製することができる。

魔力を込めたり、強化を行うと複製数は変動する。

例えば武器に魔力を最大限込めると、その武器は光輝き、その光自体に物理的攻撃が可能となり、斬撃を魔力に乗せて飛ばすことも可能。
魔力に比例して持続時間、威力がともなう　。

次に佐倉杏子さん　。
彼女願いが何なのかは教えてもらえなかったけど、やはり魔法少女としてベテランなので、自分の能力はだいたい知っているようだった。　さやかと同じく接近戦主体で槍を主に使っているが、創生できるのは槍だけでなく、複雑な仕組みでないものならなんでも創生魔法で作り出せる。
やろうと思えば自身の分身も１３人くらい可能らしく、その技のバリエーションは多種多様ですごかった。ベテランぱねぇ！
さやかと同じく、自分の魔力による強化が可能で、槍の大きさも自由に変えれるそうで最大２５メートルの槍の創生を成功している。

次に暁美ほむらさん。
彼女も願いが何なのかは教えてくれなかったが、彼女もベテランというか、イレギュラーなので、自分の能力は嫌というほど理解しているそうです。
彼女の魔法は時間及び異空間魔法が主体で、基本的には遠距離型。
さやか達とは根本的に種類が違うという感じで、創生魔法や魔力消費による強化は使えないようである。
ただ時間を止めるという最強の能力があり、攻撃力のなさを文明の機器で補うようである。
文明の機器は異空間魔法により収納されていて、この空間がいっぱいになることはないらしい。
ワルプルギスの夜を異空間魔法により閉じ込めたらどうだろうという案もでたが、元よりワルプルギスの夜は通常異空間にいて、現れるときだけこの次元に降りてくるそうなので意味はないらしい。

魔力消費による遠距離操作が可能でイメージ的には軽いサイコキネシスみたいなもので、武器を一度に扱うこともできる。ある種最強に見える時間停止魔法はなかなか弱点が多いらしく、まずその一つが暁美さんの体に触れてしまうと触れたものも時間は動きだしてしまうということである。
これにより直接攻撃に大幅な制限ができてしまうことである。
でもこれは裏を返せば彼女に触れていれば仲間達の時間を止めずに立ち回れるということでもある。
さらに遠距離攻撃も彼女の体から離れると時間停止してしまって、動きだした時にそれが確実にあたるわけではないということ。
時間停止は魔力が続くかぎりできる。

以上がかれらの能力と　特性である。

これを基に出された作戦は合体技である。
理由はいたって単純である。
ワルプルギスの夜はとても強い魔女で結界を張る必要がなく、現れただけでも都市を一つ消し飛ばせるほどである。ならばワルプルギスの夜が現れるその一瞬が僕達に残された唯一の希望である。
まずワルプルギスの夜が現れた瞬間暁美さんの時間停止能力を使い空間凍結をはかる。
だが現代の人類兵器では普通の魔女は倒せても、ワルプルギスの夜は倒せない。
彼女の攻撃力の低さをさやかと佐倉さんでカバーしてもらう。
彼女達の攻撃力は人類の兵器とは比べものにならない。
つまりさやかと佐倉さんには暁美さんに触れた状態でワルプルギスの夜に魔力がつきるギリギリまで攻撃してほしいという作戦だ。
ただこれには問題点がある。
それは攻撃部隊の彼女達はどちらも接近戦主体ということだ。
いくら彼女達が強いと言っても　一撃でワルプルギスの夜は倒せな

い。　さっきも言ったとおり暁美さんに触れてしまったら、触れている間は時間は動き始める。
暁美さんに触れている彼女達が攻撃するということは間接的にワルプルギスの夜も暁美さんに触れてしまうということである。
つまり攻撃されている間だけワルプルギスの夜は動くことができて、彼女達の姿を視認することになってしまう。
そのリスクを減らすためにさやかと佐倉さんにはまったく同じタイミングで攻撃し続けてもらう。
勿論ワルプルギスの夜はさやか達に気づくだろうけど、攻撃部隊のすばやさと暁美さんの魔法があればおそらく問題ないはずだ。
佐倉さんに鎖を創生魔法で作ってもらって、暁美さんを軸にすればある程度の攻撃範囲は拡大できる。
ただ、見えない相手と全く同じタイミングで攻撃するということは並大抵のことではない。
いちいち合図をしあっていては時間もかかるし、突発的な事故だけで失敗の確率も高い。
この作戦の失敗はこの見滝原市の住民全てが死ぬということだ。

そこでワルプルギスの夜がくるまでのこの1週間さやかと佐倉さんには全く同じ生活をしてもらい、お互いの動作、行動、呼吸を全て意識してもらう。　これについてはさやかも佐倉さんも猛反発していた。
それはそうだ。プライバシーも何もあったものではない。
僕と鹿目さんの2人による必死の説得によってなんとか承諾してもらうことには成功した。

佐倉さんの家族は2年前の事故でみんな死んでいて、身よりもいなく、一人で暮らしているそうで、さやかの家に佐倉さんがくるということになった。
逆の方が良いのではという意見がでたが、さやかの家族はさやかが

1週間いなくなるだけで、大騒ぎだろう。
ということで幻術及び洗脳魔法でさやかの家族には2年前事故で家族を失った佐倉さんを幼なじみであるさやかの家が引き取っていたという暗示をかけた。
これで準備はできた。
さやかと佐倉さんにはプライバシーを無視したドキドキライフを送ってもらった。だがこの訓練は思っていた以上に難航した。
さやかと佐倉さんのコンビには全くといっていいほど協調性といものがなかった。
彼女達には勿論動作呼吸を意識した状態で魔女退治もしてもらった。

危うく2人とも死にかけた。
暁美さんがいなければ危なかった。

まずはさやかと佐倉さんの協調性を高めることに集中することになった。

その間暁美さんは武器の調達をするために日本中の軍事施設を回るそうで、この問題は僕と鹿目さんに任された。僕と鹿目さんの見解の結果とりあえず彼女達2人にはデートをしてもらうということになった。
ワルプルギスの夜決戦前に気が抜けてしまうがしかたない。
佐倉さんに先をこされてしまった。
僕は若干落ち込みつつ鹿目さんと一緒に2人のあとを隠れてついていった。

結果的に佐倉さんの根負けというか、食いしん坊体質のおかげで現状はあっさりと打開された。

佐倉さんはただいま美樹家の子供である。家庭にはそれぞれルール

というものが存在する。
美樹家はおこずかい制度である。
彼女は片時も食べ物　を離さず食べ続けた。
勿論すでに彼女の財布はからだ。
結果何も買えなくなり彼女は強烈な飢餓に襲われた。
それはもう、警報機のように鳴り止まない腹の音。実にかわいそうだった。
それを見かねたさやかは、しょうがないといわんばかりに頭を抱えながら売店で彼女に大量のお菓子をおごったのだった。

「別にあんたのためじゃないんだからね。早くその腹の音をなんとかしなさい。」

さやかのこの言葉が決め手だった。

えずけされた彼女はハンパなく素直になった。
まさかワルプルギスの夜打倒に協力してくれるのは暁美さんにえずけされたからでは、と疑ってしまう程に彼女達は仲良くなった。
仮にも彼氏としては心配になるほどに。
暁美さんが帰って来たときには彼女達は最強のコンビとなっていた。

最後に暁美さんと交えての3人の連携も完璧だった。

そしてついにその日はやってきた。

この日の為に僕達は全てをかけた。

やるべきことは全てやった。

見滝原市最大戦力
魔法少女３人
グリーフシード１２個
暁美さん専用武器総戦力第３次世界対戦クラス

第八話　僕達は知っているよ

ワルプルギスの夜を倒すには見滝原市最大戦力である魔法少女、暁美ほむら、佐倉杏子、美樹さやかの３人の魔法少女の力を合わせるしかない。
それは文字通りの意味で、彼女達には合体技をやってもらう。

勝負は一瞬

ワルプルギスの夜が姿を現すその一瞬

その瞬間に暁美さんの時間停止能力とさやか、佐倉さんの近接最強コンビで決めてもらう

暁美さんに触れている状態なら時間停止の中でも行動可能だ。
だがそれはワルプルギスの夜に直接攻撃のリスクを意味する。
暁美さんを軸に鎖を使用し攻撃範囲の拡大はできる。
しかし暁美さんに触れているさやかや佐倉さんがワルプルギスの夜を直接攻撃すれば攻撃を受けているワルプルギスの夜の時間も動いてしまう。そのリスクを減らす為にさやかと佐倉さんには全く同じタイミングで攻撃をしてもらう。
これは相当難しい戦闘スタイルではあるが彼女達なら絶対できるという確信が僕にはある。
その為の一週間だ。

僕達はこの一週間でできることはやった

ワルプルギスの夜はもうすぐそこにきている

「さやか…」
僕は結局彼女の背中を見ることしかできない。
「本当に恭介はむちゃするよね。ここだって十分危険なのに」
「さやかには言われたくないな。僕には僕にできる戦いをするだけさ」
「ただの人間のくせに死んだらどうするのよ」「死なないさ、さやかが死なないかぎり。忘れないでくれ、君は僕なんだ。君が死んだら僕も死ぬ。僕も生きてはいられないんだ。だから無理はしないでくれ。」
「そうなると無理をしないわけにはいかないかな。恭介が死んだらわたしは生きてはいけないもん。だから、こんな時くらい無理をさせて。絶対守ってみせる」
「これが最後のキスにならないことを祈ってるよ」
「うん…」
僕達は確かにここに生きている。
互いが互いを支え合わないと生きて生けない、立ってはいられない脆弱な僕達だけど、僕達は確かにいきている事を実感した。「じゃあ、いってくるね」
「ああ…いってらっしゃい…」
僕は彼女達の飛び立つ後ろ姿を見る。
もう何度も見ている光景。僕は歯を食いしばって泣いていた。
悔しくて、何にもできない自分がなさけなくて。
なんで彼女達が戦わなければならないんだ。僕はなんで戦えないんだ。
「ちくしょう…」
なんでそんな小さな身体で僕達の命を背負わなければならないんだ。

なんで僕は背負えない。
僕は何もできない。
僕はどうしようもなく彼女の重荷で足手まといにしかならなかった。

「上条くん…」
気がつくと鹿目さんがいた。
彼女も涙を流していた。
彼女も悔しいのだろう。
何もできない自分が何より辛いのだろう。
「カッコ悪いところ見られちゃったな…」
「私ならこの戦いを終わらせれるのかな…」
「それはダメだ。君はまだ契約しちゃいけない。彼女達の戦いをこれで最後にするために…」「たとえ誰が死んだとしても…」

「そうだね…最後にみんなで笑って日常に帰ってもらうために」

「僕達はたえなければならないんだ。自分の無力さと向き合わなければいけないんだ」

何もできない僕たちはただ祈ることしかできない空から女性の笑い声が聞こえた。

その声は全ての絶望が含まれているようだった

狂っているかのように

聴いている僕が狂ってしまいそうだった。

本当に一瞬だった。

３台の石油トラック、３８６発のロケットバズーカ、　１５発の対空ミサイルと１５２個設置されたプラスチック爆弾が盛大に打ち上げられた。

爆炎が広がるなか彼女達魔法少女はワルプルギスの夜に怯むことなく突っ込んだ。

暁美さんの時間停止能力が発動したのだろう。

いくつもの光輝く赤い斬撃と青い斬撃がワルプルギスの夜を切り裂いた。

ワルプルギスの夜はあっけなくその体は崩れていって、地上に落ちてゆく。

最強の魔女である彼女は最後まで笑っていた。
最後まで狂ったように笑っていた。まるで泣き叫ぶように
怒っているように
世界を呪っているように

これで戦いは終わりを迎えたと思った

終わったと思ったのに…突如ワルプルギスの夜は泣き叫んだのだ

笑い狂っていた彼女は突然泣き狂ったのだ

悲鳴のような雄叫びがあたりに響いたと思ったら

崩れているはずのワルプルギスの夜の身体は歪な光を発する

その光は足りない何かを補うように僕たちを吸い上げた。
僕と鹿目さんはなすすべもなく彼女に吸いあげられてしまった。
気がつくと隣でさやかは僕の手を握って泣いてる
何でさやかは泣いてる
お願いだそんな悲しい顔をしないでくれ
僕がちゃんとそばにいるから
さやかを1人にしないから
さやかの握り返した。僕はここにちゃんといるよ。だから、そんな顔をしないでくれ
「よかった、恭介…」
「さや…」
僕が彼女の名前を呼び終える前に甲高い叫びが響いた「キャアあああああ！！」
僕はこの絶望そのもののような声を知っている「まさか、ワルプルギスの夜…」
「そんな…あいつはもう…」
「アアアアアアアアアアアアアア」
ワルプルギスの夜は叫び続ける
泣き叫ぶ
泣き狂う
まず状況確認が先決だ

「さやか！グリーフシードはまだいくつ余ってる！」
「かなりまずい…、あと1回分使えるやつが一つだけ」
あたりを見渡すと魔女の結界の中にいることは確かだ。
鹿目さんがいないということは別の結界の中にいる可能性が高い複数の結界が用意されている。
だとすると狙いは魔法少女をバラバラにして戦力を分断することか。
救援は望めない
目の前にいるあいつが本体
姿を現したワルプルギスの夜の形は以前のものとは全く違っていた。
彼女は身長１５０くらいの小柄な少女の形をした影だった。
顔は影で全く見えないが泣いていることだけわかる。
血の涙を流している
ゆらゆらとまるで魔力の塊みたいだ。
その体は小さくても圧倒的な威圧感。
たとえ結界をつくらなければ維持できないほど弱っていたとしても間違いなく最強の魔女　。
「待ってて恭介！すぐに終わらせる！」
「待ってくれさやか！」
さやかは手にもっている長剣に魔力をこめたのだろう刀身は青く輝いていた

「だあああぁぁぁぁ！」

「キャアァァァァ」

ワルプルギスの夜の手にはさやかと全く同じ長剣を持っていた

奇声を発しながらさやかの長剣を受け止める

さやかの連続攻撃を難なく受けきっている。

そのはずなのにワルプルギスの夜は苦しそうに叫び続ける。

彼女はいったい何に苦しんでいるんだ何かが引っかかる。

そもそも何故僕はここにいる。

何故僕とさやかが一緒にいる。

ランダムに僕達はこの結界に送られたと思ったが違うのか？

ただの偶然にしては何かが引っかかる。

さやかの猛攻撃はやまずにワルプルギスの夜を攻め続けた。

彼女は相変わらず淡々とその攻撃を防いでいた。

彼女は何故こんなにも1人で泣いているのだろう

何故こんなに壊れているのだろう

何故こんなにも狂ってしまったのだろう

魔法少女のなれの果てである彼女は何に希望を抱き、何故絶望してしまったのだろう

「これなら…どうだ！」

さやかの体の回りには取り囲むように長剣が渦を巻いている。さやかはゆっくりとワルプルギスの夜に近づいた。さやかは剣を取り、急激に間合いを縮めた。

さやかの攻撃を受け止めるワルプルギスの夜

さやかは攻撃を止めない

さやかの回りには３０本以上の長剣がある。それを変則的に使っている。対してワルプルギスの夜は一本だけ。

でも、強度に絶対的な差があり、さやかの長剣は崩れていく。それでもさやかの猛攻はとまらない。決して怯むこともなく。全ては他をいかすために。

手数で勝るさやか。数多くの長剣により生じたワルプルギスの夜の隙をさやかは見逃さなかった。

さやかの右拳には青い光が凝縮されている。魔力の純粋集中による強化がされている。

「これで…終わりだ！」

その拳はワルプルギスの夜を貫いた。

しかし、ワルプルギスの夜は体を貫かれているにも関わらず、まったくこたえていない。「さやか！」

「くっ！」

さやかの体はワルプルギスの夜の体から無数にでてくる腕によって固定される。
「アアアアアアアアアアアアアアアア」
ワルプルギスの夜の剣はさやかを切り刻む
「きゃあああああ」
さやかの腕が足が切り落とされる
それでもワルプルギスの夜の猛攻はとまらない
さやかの体はぐしゃぐしゃにされて壁に叩きつけられる
それでも彼女のソウルジェムは傷ひとつなくて
彼女の体は回復していく
死んで回復の繰り返し
そんな地獄のような惨劇は続いた
まるでソウルジェムをよけるように
まるで、さやかを魔女にさせようとするように
でも僕はそんな事を気にしてる余裕なんてなくて
僕は必死にさやかのところまで走った
「もうやめてくれ…　お願いだからこれ以上さやかを傷つけないでくれ…
彼女はもう十分すぎるほどに傷ついてきて苦しんできたんだ。かわ

りに僕を殺していいから、何度も僕を殺してくれていいから」
僕はさやかの体を力いっぱい抱きしめる。
さやかの血まみれの体はとても軽かった
僕は泣きながらワルプルギスの夜に懇願するしかなかった
「恭介…なにしてんのよ…早く逃げて…」「もういいんだよ…さやか…」
僕は死を覚悟してワルプルギスの夜を見た
「キャアァァァァ！」
何故かワルプルギスの夜はさっきよりまして苦しんでいた。
泣き狂っていたそうか…ワルプルギスの夜は希望を求めていたんだ
その身は絶望に落ちたはずなのに彼女は希望を求めたんだ。
僕とさやかは君の願いで希望だったんだ。
だから、僕達の関係を攻撃できない
自分の希望を壊してしまいそうで怖いのだろう
彼女は怖れながらも望んでしまったんだ。
だから僕達を引き合わせたのだろう。
彼女はきっと支えてくれる存在が何より欲しかったのだろう。

僕とさやかのような関係を作りたかったのだろう
そうか僕達の関係は君の希望になれたんだね
それなら僕達が終わらせないと
僕達は知っているよ
一人で壊れる苦しみを
一人で泣く苦しみを
一人で狂う苦しみを
「さやか、まだやれるかい？」
「…もちろん！」
さやかは最後のグリーフシードでソウルジェムを浄化した
一本の長剣を僕とさやかは握る
2人で支えあうように
手を握りあうように
さやかの青い光が刀身に込められる
さやかは限界まで魔力を長剣に込める。刀身は光り輝く。まるで青い太陽のように。とても暖かくて、優しい光だった。

僕達はワルプルギスの夜にその剣を突き刺す。彼女は僕達の渾身の
一撃を防ごうとはしなかった
僕達を眺めたままただ欲するように
届かない光に必死に手を伸ばすように…
僕達は君の希望だから
君の絶望は僕達が全て吹き飛ばす
ワルプルギスの夜の体を青い光が包み込む
彼女の影を青い光が照らしていく
彼女の顔はもう泣いていなかった
とても嬉しそうに微笑んでいた
そして幸せそうに消えていった
「ありがとう…」
最後に彼女がそう言っていたような気がした
その声はとても綺麗で美しく響いた

最終話　幸せに決まってる

僕達の戦いはこれで終わったんだ。

結界が崩れてもとの世界に戻ってくる

みんな無事ワルプルギスの夜は倒したようだ。

辺りはもうボロボロだった。

見慣れた街並みは崩れて何がなんだかわからなかった。

暁美さん、佐倉さん、鹿目さんとも合流した

みんなボロボロだった。

特に暁美さんはひどかった。

どうやってやったかわからないがソウルジェムの穢れすらエネルギーに変えたようで、何故彼女が無事なのか全くわからない状態だ　。

さやかと佐倉さんも

ソウルジェムは濁りきっていた。

グリーフシードはもうない

状況は最悪だった

「やっとワルプルギスの夜を倒せた…みんなのおかげよ…ありがと

う」
暁美さんは遠い目をしていた
「先にいってるわね…さよなら」暁美さんは自分のソウルジェムを壊そうとした
「やめて！ほむらちゃん！」
鹿目さんは暁美さんの腕をつかんでとめる
「離してまどか！こうなってしまってはどうしようもないのよ！こうするしか…」
「まだ方法はあるよ！
キュゥべぇ！私あなたと契約するわ！」
「ちょっと！まどか！何を言っているの！？やめて！せっかくワルプルギスの夜を倒したのに…意味ないじゃない！」
暁美さんは必死に鹿目さんをとめた
僕は鹿目さんの目を見た
鹿目さんも僕を見て頷く
「頼んだよ…鹿目さん」
「あなたまで何をいっているの！魔法少女になったら救いなんてないのよ！」
僕と鹿目さんは前から相談しあっていた。
どうしたらだれも魔法少女にならなくていいかを

もとの女の子に戻れるか
平穏を手に入れるか
誰一人犠牲になることなく幸せになれるか
「ごめんね…ほむらちゃん。わたし魔法少女になる」
「まどか、そんな…」
「信じて、絶対に、今日までのほむらちゃんをみんなを無駄にしたりしないから」僕にはキュゥべぇという魔法の使者は見えない
鹿目さんはまるで一人叫んでいるように
「全ての魔法少女に1度だけもとの女の子に戻るチャンスを頂戴！」
鹿目さんが叫んだ瞬間彼女の体は光輝き、その光は世界に広がった
その光は暖かくて、優しくて、とても強かった。
世界のルールがかわったかのようだった。
鹿目さんの姿は魔法少女になっていた。
全体的にピンク色でかわいいふわふわのスカートをはいていた。
正面には見たこともない白い小動物のようなものがお座りしていた
あれがみんなが言っていたキュゥべぇか
話しに聞いていたとおりの姿だ
何故僕が突然キュゥべぇの声が聞こえて、姿が見えるようになったかはだいたい予想できるけど

噂通り、いやな事をするやつだ

「鹿目まどか君の願いは叶えられた。これが君の望んだ世界だ」

「どうゆうこと？これでわたし達普通の人間に戻れるの？」
さやかがキュゥべぇに質問する

「そうだよ、君たちは僕に解除の契約をするだけでソウルジェムはただの石ころになり、魂は肉体に戻る」

「ほんと！これでわたし達もとにもどれるの？」
「でも、まどかはどうなるの？」

「それについても、問題ないさ。鹿目まどかの願いは彼女自体も適用される」

「それじゃあほんとにこれで終わりなんだ！」

「ただし、君たちの願いは返してもらう。
願いはもとの幻想に戻ってもらうよ」

「え…それって…どうゆうこと…？」「君たちはどうやって願いを叶えるか知っているかい？君たちの途方もない願いは別に僕達が叶えているわけじゃないんだ。そんなことは僕達にできるわけないんだよ。君たちの願いを叶えたい希望という感情エネルギーを使って願いを現実に変えているだけなんだ。君たちが魔法少女をやめるというのは僕としてはとても残念な事だけど、仕方ないから君たちの希望という感情エネルギーだけはもらっていくよ」

「そんな…それじゃあ…なんにも変わらないじゃない！今までの事全部意味ないじゃない！」

「美樹さやかが魔法少女をやめれば上条恭介の左手は再び動くことはなくなる

佐倉杏子が魔法少女をやめれば彼女の父親の名誉はなかった事になる

暁美ほむらが魔法少女をやめれば彼女は一番はじめにいた鹿目まどかのいない世界に戻ることになる

そして鹿目まどかが魔法少女をやめれば　再び魔法少女は死ぬまで魔法少女のままになるんだよ。

もちろん、一度解除すれば二度と魔法少女にはなれない。君たちの願いは叶えられることはできなくなる。

さあ君達はどうするんだい？」

僕にその言葉を聞かせることによってさやかの契約解除を阻み、あわよくば鹿目さんの契約解除も延期させる事を狙っているのだろう

でも、あんたは間違ってる。

そう断言できることが一つだけある。

僕達はあんたに頼らなくても願いを叶えることはできる。

僕達は幸せになれる。

「そう、なら決まりね…」

暁美さんは鹿目さんを抱きしめる
「まどか…私未来から来たのよ。あなたを守る為に…
何度もあなたと出会ってきたの。でもここでお別れだね。絶対に元の女の子に戻ってね。約束だよ」

「ほむらちゃん…」
「あなたに最後にお願いしたい事があるのだけどいいかしら？」

「あたりまえだよ！」

「私が元いた世界に帰ったらこの世界の暁美ほむらはきっと何も知らないと思うの。だから、何も知らない馬鹿な私を守ってあげてくれないかしら？もう魔法少女にならないように、友達として見守ってあげてほしいの」
「約束するよ！たとえどんな事があってもほむらちゃんだけは守ってみせるよ！」

「ありがとう、まどか…私のたった一人の親友。元気でね。じゃあ、バイバイ」「解除の契約をするわ」

「本当にいいんだね。君が必死になって守ったものは、君のいる世界にはないんだよ」

「ええ、だって守った証は確かにあるもの。この世界にまどかがいるかぎり。」
「ほむらちゃん！私絶対に忘れないよ！今のほむらちゃんのおかげで、守ってくれて、望まれたからいまの私があることを」

「ほむらちゃんの事絶対わすれないよ！」
「まどか！」

いつのまにか暁美さんの瞳に大粒の涙を浮かべていた
彼女が初めて見せる溢れんばかりの感情であった
彼女のソウルジェムが色を失った
彼女は気絶したように倒れた
彼女の声だけがあたりにこだまとなって響いていた。
「ほむらちゃん！」
鹿目さんが暁美さんを抱き寄せると暁美さんは眠っているようだった。
鹿目さんは暁美さんを強く抱きしめた。
「あたしは、このままでいいよ」
佐倉さんがキュゥべぇに話しかけた。
「別にクソ親父の名誉なんてどうでもいいんだけど、こいつら魔女から守るやつは一人くらい必要だってことさ」
「杏子ちゃんお願いだからやめて、これは誰かに押し付けるものじゃないの。杏子ちゃんはさやかちゃんと一緒に暮らして何も感じなかったの？幸せじゃなかったの？」「それは…」
「杏子ちゃんが契約解除するまで私は絶対魔法少女で居続けるよ」
「まったく、しょうがねぇな…それを言われちゃ、従うしかないだろ…でないとあいつが報われねぇ」
「ありがとう…杏子ちゃん」

「解除の契約するぜ」

「君もかい？本当に残念だよ」

佐倉さんのソウルジェムは色を失い服装はもとにもどる

「さあ、今度はさやかの番だ」

「だって恭介！そうしたらもう2度とヴァイオリンが弾けなくなるんだよ！考えようよ！もっといい方法がきっとあるよ！」

「君が魔法少女として戦っていた時僕は辛くて死にそうだったよ。何もできない自分が悔しくてたまらなかった。左手が動かないなんて些細なことだ」

「でも、わたしはいや！また、恭介が苦しんでいるのに何もできない自分に戻るのはいや！恭介が幸せじゃないとイヤなの！」

僕は力いっぱいさやかを抱きしめた

「左手が動かなくても僕は幸せだ！だってさやかがいるじゃないか！そばにいてくれるじゃないか！僕はあの頃の弱かった自分を一度だって許したことはないんだよ、もう絶対さやかにそんな思いはさせない！だから1人の女の子として僕のそばにいてくれ」

「だって、じゃあ今までのこと全部何だったのさ！意味ないじゃない！わたし達がしてきたことって何！ただ自分を傷つけただけになっちゃうじゃない！そんなのあんまりだよ！誰も救われないよ！わたしも恭介も！」

「意味ならあっただろ！確かに目には見えなくても！確かにここにあるんだ！無駄なことなんて一つもなかった！意味のないことなんて一つもなかった！それは僕達が一番わかってることだろ！それは何があってもなかったことにならない！」

泣きじゃくるさやかの頭を撫でる

「さやか、僕達はずっとがんばってきたじゃないか。お互いを支え合って、補い合って生きてきたんだ。左手が動かないからなんだ、魔法少女じゃないからなんだ。僕達はそんな些細なことじゃ変わらないよ」

「それとも、さやかは僕がヴァイオリンが弾けたからそばにいてくれたのかい？
もし、弾けなくなったら君は僕から離れていってしまうのかい？君は僕の奏でるヴァイオリンが僕の代わりになるのかい？」

「そんなことない…恭介の代わりなんてないよ…　わたしは恭介が恭介だから好きなんだよ…」
「僕もさやかがさやかだから大好きだ！僕の左手じゃあさやかの代わりにはならないんだ！」

「解除の契約…する」

事後報告というか後日談かな？

あれから見滝原中学に佐倉さんは転校してきた。
クラスの男子は大盛り上がり
僕の左手が再び動かないようになったなんて些細ことみんなすぐに忘れた。
身よりのない彼女はさやかの家で同居しているそうだ。
本格的にさやかをとられそうだ。
いつかこいつとは決着をつけないといけないようだ、と密かな決心をする

やっぱり暁美さんの記憶はなかった。
話しを聞けば病院を退院してから記憶がないそうだ。
でも、彼女は夢を見た、それは誰かを何度も守ろうとして
救おうとがんばって、でも結局誰も救えない自分に絶望したそうだ
悔しくて惨めでつらかった
そういっていた。

辛そうにしている彼女の隣にはいつも鹿目さんがいた

鹿目さんがいつでも彼女を支えた。
きっと鹿目さんの中には2人の暁美さんがいるのだろう
今の少しおどおどした頼りない彼女も昔の強く凛とした彼女もきっ
とどちらも大切なのだろう。
どちらも守りたいのだろう
暁美さんが魔法少女になることはないと僕は確信している。　鹿目
さんが彼女を守り続けるだろう。
安心している反面僕は暁美さんが心配だ。彼女の貞操とか。
いや、マジで最近あの2人は危ない
鹿目さんは暁美さんを一生面倒みるとか言ってたし、最近の彼女は
男らしいのだ。

そして僕達はといえば

今日はみんな僕の家にいる

あの日一緒に戦った彼女達を招待した

佐倉さん、鹿目さん、暁美さん、そしてさやか

今日呼んだのは僕のヴァイオリンの演奏を聞いて貰うために
もちろん僕の左手は動かない
だから左手を紐でヴァイオリンに固定させて弾いた
それはもうひどいもんだ
ただ音が出るだけだ
その音でさえ耳を塞ぎたくなるような音だった
それでも演奏が終わればみんなが拍手をくれた。
さやかはこんな僕の演奏でも本当に嬉しそうに僕に笑顔をみせてくれるのだ
ああ…僕の誇りだ。
左手なんて動かなくても僕の誇りは確かにここにあるのだ
幸せだ…
もう、何もいらない
さやかがいてくれればそれでいい
そう断言できる「さやかは今のままで幸せかい？」
僕のそんな質問に
「幸せに決まってる！」
そう彼女は、はにかむのだ

最終話　幸せに決まってる（後書き）

最後まで、付き合っていただいて本当にありがとうございました。
マミさん本当にごめんなさい。マミさん恭介と出会う前から他界してしまっていて…どうしようもなく…

以上が僕がどうしてもさやかの幸せな姿が見たくて書いた物語です。
あなたに楽しんでいただけたならこれ以上嬉しいことはありません。

後日談　救われて、報われた

僕とさやかは道を歩いていた

2人で手をつないで

今は冬で今日は雪が降っている

いや降ってきたの間違いだ

だから僕達は傘をもっていない

さやかは僕の右手を握ってくれている

雪は冷たいけれど、右手だけはとても暖かい

そう思った

「本当に…これでよかったのかな…」

さやかは小さな声で言った

これじゃあ、誰も幸せになれなかったんじゃないか、なんて思ってしまうよ。わたし以外誰も幸せになれなかったんじゃないか、他にもっといい方法があったんじゃないか、なんてわたしは考えてしまうよ。何もできなかったくせにね…　とさやかは言った。苦笑いをしながら

「確かにそうかもしれないね…。でもそれはさやかのせいじゃない

よ。誰のせいでもない。これは物語の世界じゃない。現実なんだ。現実はとても厳しくて辛いことも理不尽なこともいっぱいあって取り返しなんて全然つかない。死んだ者は生き返らないし、死んだ左手は二度と動かない。時間は止まらないし、過去に行くなんてこともできないし、過去を変えるなんてできない。それは決まっていることで、しょうがないことなんだ。僕達子供にはいや大人にだって変えられない。」

「そう…なんだよ…ね…　」

「でも、誰が悪かったなら、明白だ。僕が悪かったんだよ…これ以上もなく僕が悪かったんだよ…。あの日さやかに酷い事を言ってしまった僕だけが悪いんだよ。本来なら僕はさやかの隣にいる資格すらない最低の人間なんだよ」

「やめて！」

さやかは大きな声で叫んだ

そうじゃないんだよ…そんな事をいいたいわけじゃないのよ…お願いだからそんな顔をしないで…

さやかは涙を流しながらそう言った

「ねぇ、知ってる？わたしはあなたに何度も、救われているのよ。不幸のどん底からあなたは何度もわたしを救ってくれた。幸せにしてくれた。あなたがいたから生きられた。

わたしはわたしのままでいい

わたしはわたしのままがいいと恭介は言ってくれたよねわたしはその言葉を他の誰かに言ってほしかった。

大好き

こんなわたしがいいって

どんな姿でもわたしを愛してくれる

こんなわたしを幸せにしてくれる、そばにいてくれるってそう言ってくれたよね。

わたしはその言葉を他の誰でもないあなたに言ってほしかったんだよ。」

「こんなにも弱いわたしをあなたは助けてくれて、支えてくれたんだよだから許してあげて、恭介を許してくれないかな。あの日のあなたを、わたしの大切なあなたを。

どうしてもそれができないなら、わたしが許してあげるから。恭介の罪も過ちも全部わたしが許してあげるから。

さやかはそう言った。

さやかは僕を抱きしめてくれた

それはとても暖かくて、優しかった

そうしてくれたのが本当に嬉しくて

ただ嬉しくて

僕は涙が溢れ出た

僕は気がついたら滂沱の涙を流していた。

僕はあの日から一度でも自分を許したことはなかった。それは今でも…。ずっと責め続けた。誰も僕を責めてくれなかったから。僕は自分を責め続けた。

でも僕は本当は誰かに許してほしかったのかもしれない

他でもない君に許してほしかったのかもしれない

「さやか…僕は許されていいのだろうか。こんな僕でも幸せになってもいいんだろうか…君と一緒に居て、生きていいのかな？」

「そんなのいいに決まってるじゃない。そのために私達は頑張って戦ったのよ…頑張って生きてきたのよ」

「恭介…本当にありがとう。わたし最高に幸せだよ」

さやかは涙で目を赤くはらせて、顔を真っ赤にして微笑んだ

僕はその笑顔に救われて、報われたんだ。

後日談　救われて、報われた（後書き）

決してみんなが幸せになったわけじゃないし、そんなことはできないと思いますけど、それでも僕は上条恭介と美樹さやかには幸せであってほしい。
そう思います。

最後まで語り部をしてくれた恭介に一言

恭介、確かに君は取り返しのつかないことをしてしまったけど…まあ、何も、幸せになっちゃいけないほどじゃあないんだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8378x/

魔法少女まどか☆マギカ　外伝　魔法少女さやか☆マギカ

2011年11月2日02時12分発行